The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	留学生が学ぶ「日本文学史」の授業研究 : 日本文学研究入門科目としての一試案
Author(s)	二本松, 泰子
Citation	大阪大学日本語日本文化教育センター授業研究. 2010, 8, p. 35-53
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/8186
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

留学生が学ぶ「日本文学史」の授業研究
―日本文学研究入門科目としての一試案―

二本松泰子

【要旨】

日本文学を研究対象に選び、それを学ぼうとする留学生には、各作品に関わる周辺知識の充足が必要である。そこで、稿者が大阪大学日本語日本文化教育センターで担当している「日本文化研究科目」の「日本文学講義Ⅳ　日本文学史」の授業では、各作品と「女性」をめぐる問題点についての考察を進めながら日本文学史の諸事項を学んでもらっている。本稿では、このような授業の中から古典文学史（上代文学史＝『古事記』、中古文学史＝『源氏物語』）の事例について取り上げ、報告する。この報告を通じて、当該授業が、日本文学の研究を志す留学生のための「研究入門科目」として担う役割と意義を確認し、今後の課題点を明確にしてゆくことを期するものである。

Ⅰ．はじめに

当センターで学ぶ留学生には、日本の文学作品に高い関心を持ち、それを専門の研究対象として選ぶ学生が少なくない。彼らの中には、日本人の大学生でも難解と思われる『古事記』『源氏物語』『枕草子』などといった古典籍を原文で精読できるスキルを持つ留学生もいて、作品そのものを読解する能力においては相当高い水準に達していることが窺われる。しかしながら、彼らの作品に対する理解は、いずれも叙述されている本文を解釈するという範囲内で留まり、その作品に関わる周辺知識についてはほとんど認識していない。日本文学を研究するに際し、最も基礎的且つ重要なプロセスとして、作品に書かれている本文以外の知識―たとえば、作品に影響を与えた時代背景や作品の叙述基盤を支える伝承背景など―を把握することが必要不可欠であることはいうまでもない。それならば、日本文学の研究を志す留学生には、各作品の周辺知識を広げることがまずは性急に必要な課題と思われる。

そこで、当センターにおいて稿者が担当している「日本文化研究科目」の「日本文学講義Ⅳ　日本文学史」では、各作品のバックグラウンドとなった諸要素の解説に主眼をおきながら文学史の流れを論じている。具体的には、時系列に沿った時代区分（上代、中古、中世、近世、近・現代）において、それぞれの時代の代表的な作品を取り上げ、各作品の本質と関わる問題点について考察している。その一方で、時代区分にとらわれずに文学史全体を鳥瞰する視座として、作品と「女性」をめぐる問題点についても注目し、「日本文学史」を「女性」という一括したテーマで解釈する試みも進めている。

本稿では、このような日本文学史の授業のなかから、上代文学史と中古文学史の範囲における事例を取り上げ、その概要を報告する。この報告によって、当該授業が日本文学を学ぶ留学生の研究入門として果たす役割を明らかにし、今後の授業展開に資することができれば幸甚である。

Ⅱ．上代文学史と女性

文学の発生から平安遷都（794年）までの時代を「上代」とする。天皇と有力氏族を中心とし

て大和地方（奈良県）を拠点とする古代国家が成立した時代であった。

この時代の文学史における重要なテーマのひとつに「文学の発生」が挙げられる。当該授業においても、原始の日本人が「口承」によって文学を語り始め、後に漢字が伝来してから文字による記載文学が登場した経緯については必ず論じている。その際、「女性と文学」という視点において注目するべき作品として『古事記』を教材として取り上げている。本章では、当該授業で同作品を取り扱った事例について報告する。

（1）問題の所在

さて、その『古事記』は和銅5年（712年成立）の成立で、わが国で最も古い書物とされるものである。このわが国初の文学作品の成立について、同書の「序」では、以下のように説明している。

【書き下し文】

是に天皇の詔たまひしく、「朕聞く、諸の家の賫てる帝紀と本辞と、既に正実に違ひ、多く虚偽を加へたり。今の時に当りて其の失を改めずは、幾ばくの年も経ずして其の旨滅びなむと欲。斯れ乃ち、邦家の経緯にして、王化の鴻基なり。故惟みれば、帝紀を撰ひ録し、旧辞を討ね覈め、偽を削り実を定めて、後葉に流へむと欲ふ」とのりたまひき。時に舎人有り。姓は稗田、名は阿礼、年は是廿八。為人聰く明くして、目を度れば口に誦み、耳に払るれば心に勒す。即ち、阿礼に勅語して、帝皇日継と先代旧辞とを誦み習はしめたまひき。然れども、運移り世異りて、未だ其の事を行ひたまはず。

伏して皇帝陛下を惟みれば、一つを得て光宅り、三つに通りて亭育ひたまふ。紫宸に御して徳馬蹄の極まる所を被ひたまふ。玄扈に坐して化船頭の逮ぶ所を照したまふ。日浮かびて暉を重ね、雲散りて烟に非ず。柯を連ね穂を并する瑞、史書すことを絶たず。烽を列ね訳を重ぬる貢、府空しき月無し。名は文命よりも高く、徳は天乙よりも冠れりと謂ひつべし。

焉に、旧辞の誤り忤へるを惜しみ、先紀の謬り錯へるを正さむとして、和銅四年九月十八日を以て、臣安万侶に詔はく、「稗田阿礼が誦める勅語の旧辞を撰ひ録して献上れ」とのりたまへば、謹みて詔旨の随に、子細に採り庶ひつ。然れども、上古の時は、言と意と並に朴にして、文を敷き句を構ふること、字に於ては即ち難し。已に訓に因りて述べたるは、詞心に逮ばず。全く音を以て連ねたるは、事の趣更に長し。是を以て、今、或は一句の中に、音と訓とを交へ用ゐつ。或るは一事の内に、全く訓を以て録しつ。即ち、辞の理の見え叵きは、注を以て明かにし、意の況の解り易きは、更に注せず。亦、姓に於て日下をば、玖沙訶と謂ひ、名に於て帯の字をば、多羅斯と謂ふ。如此ある類は、本の随に改めず。大抵記せる所は、天地の開闢けしより始めて小治田の御世に訖る。故、天御中主神より以下、日子波限建鵜草葺不合命より以前をば、上つ巻と為、神倭伊波礼毘古天皇より以下、品陀の御世より以前をば、中つ巻と為、大雀皇帝より以下、小治田大宮より以前をば、下つ巻と為。并せて三巻を録して、謹みて献上る。臣安万侶、誠に惶り誠に恐み、頓々首々。

和銅五年正月廿八日　　正五位上勲五等太朝臣安万侶

（新編日本古典文学全集『古事記』序）

【現代語訳】

ここに、大海人天皇は次のごとく仰せになった。

朕が聞いていることには、諸々の家に持ち伝えている帝紀と本辞とは、すでに真実の内容とは違い、多くの虚偽を加えているという。今、この時にその誤りを改めないかぎり、何年も経たないうちに、その本来の意図は滅び去ってしまうであろう。これらの伝えは、すなわち我が朝廷の縦糸と横糸とをなす大切な教えであり、人々を正しく導いてゆくための揺るぎない基盤となるものである。そこで、よくよく思いめぐらして、帝紀を撰び録し、旧辞を探し求めて、偽りを削り真実を定めて後の世に伝えようと思う。

ちょうどその時、天皇の側に仕える一人の舎人がいた。氏は稗田、名は阿礼、年は二十八歳であった。その人となりは聡明で、目に見たものは即座に言葉に置き換えることができ、耳に触れた言葉は心の中にしっかりと覚え込んで忘れることがなかった。すぐさま天皇は阿礼に命じて、自ら撰び定めた歴代天皇の日継の伝えと、過ぎし代の出来事を伝える旧辞とを誦み習わせたのである。

しかしながら、時は移り世は変わり、いまだその事実を完成させることはできないままであった。

頭を伏して今の世の皇帝陛下（元明天皇）を思いみれば、誉れ高い皇統を受け継いで、徳はあまねく輝きわたり、天・地・人の宇宙の万物に通じて人民を養い育てている。身は紫宸の殿の内に坐して、徳は馬の蹄の到る果てまでことごとくに覆い尽くし、古き中国の名君、黄帝の住まう石屋にも似た大殿に坐して、威光は大海の果てを行く船の舳先まで照らしている。

日は天空に高々と照り輝いて重なり、大空にはめでたい祥を示す慶雲が浮かんでいる。また地上には、二つの枝が結び合った連理の枝や二つの茎に出た稲穂が一つに結ぶめでたい瑞が重なり、記録係の者たちは筆を置く暇もないほどである。貢ぎ物をもたらす外つ国の使者の訪れを知らせる合図の烽は次々に届き、間に立つ幾人もの通訳が言葉を変えてつなぎ渡し、贈られた貢ぎの品で溢れた倉庫の中は、隙間ができる月日とてない。

まさに、皇帝陛下の名は、夏の国の名君、禹王よりも高く、その徳は、殷の国の湯王にも勝ると謂うべきである。

ここに、名高き皇帝陛下は、旧辞が誤り違っているのを惜しみ、先紀が誤り乱れているのを正そうとして、和銅四年九月十八日、臣下、安万侶に詔りして、

稗田阿礼が誦めるところの、飛鳥の清原の大宮に坐した天皇の勅語の旧辞を撰び録して献上せよ。

と仰せになったので、謹んで詔りのままに隅々まで細やかに採り拾った。しかしながら、遥か上古の時代は、言葉も意味もともに朴直であり、文字面を整え句を構成するに際して、渡来の文字を用いて書き記すのは困難を伴うことであった。すべての言葉を唐の文章によって叙述したのでは、記された言辞が上古の心に及ばない。また逆に、すべての言葉を音を生かしながら書き連ねたのでは、文字の数があまりに多くて伝えたい趣旨が間延びしてわかりづらい。

そこでこのたびは、わかりづらい場合には、短い一句の中であっても、大和の音と唐の訓とを交え用い、わかりやすい場合には、一つの出来事を語りきるほどに長い叙述であっ

ても、すべて唐の文章を用いて記録した。そのために文章が取りにくくなった部分には注を添えて明らかにし、意味が取りやすい部分には改めて注を付けることはしなかった。また、氏の読みとして日下を玖沙訶と謂い、名の読みとして帯という漢字を多羅斯と謂うが如き、よく知られた読み方の類は旧来からの表記を踏襲して改めてはいない。

おおよそ記されている内容は、天地の開闢から始めて、小治田の御世（推古天皇）で終わっている。そこで、天御中主神から日子波限建鵜草葺不合命までを上巻とし、神倭伊波礼毘古天皇から品陀の御世（応神天皇）までを中巻とし、大雀皇帝から小治田の大宮までを下巻とした。

併せて三巻を筆録し、謹んで献上いたします。

臣、安万侶、誠に惶まり、誠に恐れつつ、頓首、頓首。

和銅五年正月二十八日

正五位上勲五等　太朝臣安万侶

（三浦祐之訳・注釈『口語訳古事記〔完全版〕』）

これによると、第40代天皇の天武天皇が「邦家の経緯、王化の鴻基」となる帝紀と旧辞の誤りを削除し、正しいものを定めて後世に伝える旨を企画した。同天皇は、稗田阿礼に命じて「帝皇の日継及び先代の旧辞」を誦習させたという。しかしながら、途中で天武天皇が崩御したため、この企画は頓挫した。それを受け継いだのが第43代天皇の元明天皇である。同天皇は和銅４年（711）９月18日に臣太安万侶に詔を下して、稗田阿礼が誦習した旧辞を撰録して献上することを命じた。勅命に従った太安万侶は、和銅５年正月28日に『古事記』三巻を献上したという。

以上のような叙述について、当該授業の受講生のうち、『古事記』を自国などで習ったことのある留学生のほとんどは、右掲の叙述についてもよく知っている。しかしながら、その「知っている」の水準はやはり本文に記載されている内容の範囲で、ここに見える「稗田阿礼」という人物についても該当記事に記されている以上の知識はまったく有していない。そのため、彼らのうちのほとんどは、『古事記』の成立は、それを記録して献上した太安万侶によるものと認識している。しかし、右の記述に見えるように、『古事記』の母胎となった原典は、稗田阿礼が誦習した「帝皇日継及び先代の旧辞」である。『古事記』の成立を理解するには、むしろ、この人物について注目する必要があろう。しかも、この人物についてはその性別を女性と解釈する見解が古くから存在し、日本文学史と女性をテーマとする当該授業では、特に見逃すことができない。そこで、当該授業においては、稗田阿礼を女性に比定した先行研究を中心に、この人物にまつわる知識を留学生に学習してもらっている。次に、その具体的な授業内容について報告する。

（２）文学の発生―『古事記』の稗田阿礼―

当該授業では、稗田阿礼女性説を唱えた先行論文の中うち、もっとも良く知られた柳田国男氏の『妹の力』所収「稗田阿礼」を取り上げている。同論考では、稗田阿礼が女性である根拠について以下のように説明する。

古事記の伝誦者稗田阿礼が女だつたといふことは、故井上頼圀翁の古事記考に由つて、先づ明白になつたと言つてよいのだが、其後此問題を省みた人も聞かず、況やさうすると如何なる結論に達するかといふことを、考へて見た者も無さゝうに思はれる。（中略）
阿礼が女性であつたといふ説は、伊勢の学者たちが夙くから之を唱へて居た。井上翁は単に其説を是認支持せられた迄である。（中略）彼が男でなかつた証拠も挙げられぬが、幸ひにして稗田といふ家名があまり類の無いものであつた為に、今ではほゞ安全にそれが如何なる門統に属した女であつたかを知り得るのである。其説の要点を紹介するならば、大和志料に引用した大倭社注進状の裏書なるものに、齋部連首・中臣大島連等、勅を奉じて稗田阿礼が語る所の古事記を撰録す。今の古事記是也。阿礼は宇治土公の庶流、天細女命の末葉なりとあり、又天細女命の子猿女命神楽を奏す。永く子孫の女等神楽を仕へ奉るとある。猿女君氏の人々が、天岩戸の由緒を語り、天細女の後裔たる廉を以て朝廷に仕へて居たことだけは、紀記の中にも明らかに見えて居り、稗田阿礼が同じく此神の末であつたことだけならば、古くは弘仁私記の序の注にも出て居るのである。大和には今の添上郡平和村に大字稗田があつて、式内比売神社の所在地を以て目せられて居る。即ち多分一族の此邑に分居したものが、稗田氏と称して朝廷には召されて居たのである。是だけが先づ主要なる論旨であつた。

（『定本柳田国男集』第九巻「妹の力」）

右掲の柳田氏の説によると、稗田阿礼は天細女命の末葉であるという。この一族は、天細女命の子の猿女命が神楽を奏したのをはじめ、代々の女性たちは神楽を以て奉仕するようになった。この猿女君氏の一族が大和国添上郡平和邑大字稗田（現・奈良県大和郡山市）に分居したのが稗田氏で、阿礼はそれに連なる人物であったとされる。さらに、柳田氏はこの猿女君氏について、以下のような説明を続けている。

右の猿女君氏は、代々女を以て相続すべき理由のある家であつた。女神にして子孫あらんこと疑はしと、本居翁を始め多くの人は首を傾けたが、是は相続が必ず親から子に伝はるものとした上の議論で、神宮の御子良子の如く幼少の時を限つたものは勿論、常陸鹿島の物忌のやうに、一生清浄に神より外の人には見えなかつた場合でも、定まつた家からばかり引続いて其役人を出して、之に由つて家職を伝へて居た例は現代にもまだある位で、男で無ければ世襲せぬといふ理由は無い。しかも世を追うて女系相続の風が珍らしくなつた為に、猿女君の家では力を入れて、その特殊の事情を説いて居たのである。書紀の神代巻には「皇孫天細女命に、汝宜しく顕はす所の神の名を以て姓氏と為すべしと勅したまひ、因て猿女君の号を賜ふ。故に猿女君等、男女皆君と為すは此縁なり」とある。顕はす所の神とは猿田彦命のことである。後世には託宣を伝へ、且つ御祭の仲立をすることを顕祀と謂ふのだが、この朝廷の御昔語りに於ては、単に出でゝ応接の役に当つたことになつて居るのである。此顛末を古事記の方では、今少しく詳かに述べてある。

かれこゝに天宇受売命にのりたまはく、この御前に立ちて仕へまつれりし猨田毘古の大神をば、専ら顕はし申せる汝送り奉れ。亦其神の御名は、汝負ひて仕へまつれとのりたまひき。是を以て猨女の君等が後、猨田毘古の男神の名を負ひて、女を猨女君と

呼ぶこと是なり云々

さうして此次には海に漁して比良夫貝に手を咋はれた話と、海鼠の口を紐小刀で切り拆いて、此口や答へせぬ口と謂つたといふ話と、二つの稍々、おどけたる逸事が続いて居るのである。古事記には女性が猿女君と名乗つて朝廷に仕へた由緒のみならず、特に此家に関する記事が日に立つて饒多である。さうして稗田阿礼が亦猿女君の一類であつたことが証明せられたとすれば、この二つの事実には何等かの脈絡があるものと、想像することは無理でないと思ふ。

（『定本柳田国男集』第九巻「妹の力」）

これによると、柳田氏は記紀神話（主に『古事記』）の叙述を引用して「女性が猿女君と名乗つて朝廷に仕へた」由緒を説明している。稗田阿礼がこのような女系一族に連なる人物であるとするならば、彼女もまたやはり女性であった可能性が想定されよう。

そのほか、同論考において柳田氏は稗田阿礼の「アレ」という名称について以下のような見解を述べている。

最後に今一つ、自分等ばかりの非常に重要に考へて居ることは、稗田の舎人の阿礼といふ名前である。阿礼は平安朝に入つてからは、殆と上下の賀茂の御社に限られ、打ちまかせてアレヲトメと謂ふときは、即ち斉院の姫君をさすことになつて居たが、言葉の意味は有又は在の行為、即ち出現であり顕はされることであらうから、神懸りの女性が一様にさう呼ばれるのは当然である。然るに賀茂に於ては天つ神の御子が、人間の少女の胎に宿りたまふといふ神話があつた。それ故に夙くから御生野（みあれの）の神事が行はれ、ミアレは即ち御誕生のことゝ解して差支へが無かつたのである。是も勿論重要なる神出現の一例ではあつた。婦女を以て代々の奉仕者とした日本の神道では、同種の言ひ伝へは他にも尚多く存するが、形式は更に色々に変化し得る。単に所謂神のもろふしと為つて、其御力を借りて道を説く場合にも、猶我々の祖先は、彼女に於てミアレを認めたのであらう。（後略）

（『定本柳田国男集』第九巻「妹の力」）

右掲の記事によると、稗田阿礼の「アレ」は、神の誕生を表す「ミアレ」に通ずる名称で、神に奉仕した女性（すなわち巫女）を暗示するものであることを想定しているという。

以上の柳田氏の説に従って、当該授業では稗田阿礼が女性であったこと、さらにその素性が主に「神に仕える女性」（巫女）としての職掌と関わるものだったことを受講生に説明する。そして、『古事記』の本質を支える母胎（＝原拠）が彼女の誦習になる口承文芸であったことの認識を深め、それを前提として『古事記』を学ぶ導入としている。同時に、受講生においては、日本文学の発生期には女性が重要な役割を担っていたことについて理解させ、原始における日本文学と女性のあり方について認識できるように促している。

（3）授業の行い方

当該授業で使用する教材は以下の通りである。

まず、ハンドブックとして『新総合図説国語』（三角洋一他監修、東京書籍、1994年２月初版

発行）を利用している。同書は、日本の中学校・高等学校において国語科教育の副読本として採用されているもので、受講生の基礎知識を確認するのにふさわしい内容となっている。

次に、『古事記』を講読するためのテキストとして、本章で引用した新編日本古典文学全集『古事記』（神野志隆光他訳・校注、小学館、1997年５月）と『口語訳古事記〔完全版〕』（三浦祐之訳・注釈、文芸春秋、2002年６月）を用いている。前者は充実した頭注とともに脚部に口語訳が併せて掲載されており、古文の原文を学習するのに適している。後者は著者独自のユニークな表現による口語訳が読め、別個の物語のように楽しめるものである上、初心者にもわかりやすい脚注も付されている。なお、補助教材として、1959年に公開された東宝製作の映画『日本誕生』（監督・稲垣浩）のDVDを使用している。

さらに、当該授業で取り上げた問題点を考察するための参考資料として『定本柳田国男集』第九巻「妹の力」（筑摩書房、昭和44年２月）所収の「稗田阿礼」を併用している。

以上のような教材を用いながら、だいたい２コマ程度の時間をかけて、次の①～④の手順に従って授業を展開する。

①上代文学史の概略とその中での『古事記』の位置づけの確認。（『新総合図説国語』の精読による）

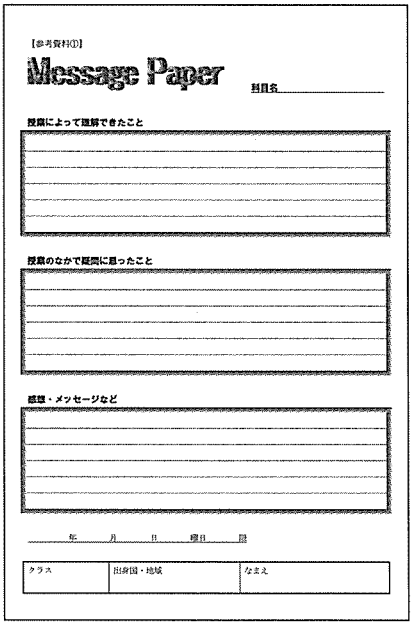
②『古事記』全体のあらすじの把握。（映画『日本誕生』の主要場面の視聴による）

③『古事記』「序」における「稗田阿礼」とその問題点についての説明。（新編日本古典文学全集『古事記』『口語訳古事記〔完全版〕』の講読による。講読該当箇所は本章第（１）節で引用した部分）

④『古事記』「序」の「稗田阿礼」に関する問題点の考察と「日本文学の発生と女性」に関する問題点への言及。（『定本柳田国男集』第九巻「妹の力」所収「稗田阿礼」の講読による。講読該当箇所は本章第（２）節で引用した部分）

受講生に対する課題については、授業中に配布するMessage paper（参考資料①）への記入

参考資料①


【参考資料①】

Message Paper　科目名＿＿＿＿＿＿

授業によって理解できたこと

授業のなかで疑問に思ったこと

感想・メッセージなど

年　月　日　曜日　限

クラス	出身国・地域	なまえ

事項を通して、毎回の授業における学習内容の確認と疑問点の整理を課している。なお、Message paperに記された質問事項については、翌回の授業で回答している。

Ⅲ．中古文学史と女性

平安遷都から建久３年（1192）に源頼朝が征夷大将軍に任官されるまでを「中古」とする。平安京（京都）を拠点とする貴族文化が花開いた時代である。

この時代の文学史におけるもっとも重要なテーマとしては、貴族社会の隆盛を背景とした、いわゆる「王朝文学」とされる作品群が挙げられる。これらは、宮廷に仕えた女性による作品が多数を占めることから、当然、当該授業においても重点的に学習を進めている。中でも、王朝文学を代表する作品として『源氏物語』は教材として必ず取り上げている。本章では、当該授業で同作品を取り扱った事例について報告する。

（1）問題の所在

『源氏物語』は全54帖からなる長編物語である。その膨大な内容を扱うのに際して、当該授業では、主人公・光源氏をめぐる女性たちを中心に解説している。ところで、受講生の中には母国語で翻訳された『源氏物語』をすでに読破しており、その内容について知悉している留学生も少なくない。しかしながら、その感想についてはさまざまで、中には批判的な意見を持つ留学生もいる。たとえば、次々と繰り返される光源氏の恋愛遍歴が「不道徳」や「浮気性」に見えるといった、現代人の倫理に基づいた非難や、延々と続く光源氏の恋愛譚がワンパターンで面白味に欠ける、といった個人的な感覚に基づいた批判などがある。いずれも、作品に対する「好き」「嫌い」の範疇での意見で、きわめて主観的なものである。個々の文学作品に対する好みは各自の自由ではあるものの、研究対象として作品を捉えるならば、主観的な感情に左右されない「読み」を実証的に行う必要がある。特に王朝文学の場合、「貴族階級」という、特殊な文化位相を持つことから、同じ日本人でも理解し難い部分がある。粗雑な知識による主観的な印象批評が先行すると、作品の意図を曲解してしまう恐れがある。

そこで、当該授業では、『源氏物語』を正しく解釈してゆくのに必要な「実証的な読み」を学ぶことに主眼をおいている。本章では、それを学ぶ題材として、源氏と契りを交わした女性の中から「末摘花」をめぐる章段を取り上げる。彼女がなぜ光源氏の寵愛の対象となったのか、その根拠となる要因について実証的に考察し、その考察に基づいて留学生たちが古典の物語を読むスキルを身に付けてゆく学習法について報告したいと思う。

さて、『源氏物語』における「末摘花」が主に登場するのは、第6帖の「末摘花」と第15帖の「蓬生」である。これらの章段で描かれる末摘花像の特徴としては、まずその醜い容姿が挙げられよう。そもそも、末摘花は物語に登場する女性の中でも、特に取り柄の少ない女性とされている。すなわち、彼女は皇族の姫君であるものの、父の常陸宮を早くに亡くしたため、後ろ盾を持たない頼りない身の上であった。そのため、生活に窮しており、さらにはそれに対処する才気も持ち合わせていないとされる。しかしそれらを上回る最もひどい欠点として、物語は、彼女の醜い容貌について詳しく叙述しているのである。女性の醜い容姿をここまで具体的に詳述するのは王朝文学において珍しい。その一番初めにして最も詳しい例としては、源氏が末摘花と一夜を明かした雪の朝、初めて彼女の容姿を目の当たりにした場面での叙述が挙げられる。

以下に該当部分を挙げる。

【原文】

からうじて明けぬる気色なれば、格子手づから上げたまひて、前の前栽の雪を見たまふ。踏みあけたる跡もなく、はるばると荒れわたりて、いみじうさびしげなるに、ふり出でて行かむこともあはれにて、「をかしきほどの空も見たまへ。尽きせぬ御心の隔てこそわりなけれ」と恨みきこえたまふ。まだほの暗けれど、雪の光に、いとどきよらに若う見えたまふを、老人ども笑みさかえて見たてまつる。「はや出でさせたまへ。あぢきなし。心うつくしきこそ」など教へきこゆれば、さすがに、人の聞こゆることをえいなびたまはぬ御心にて、とかうひきつくろひて、ゐざり出でたまへり。見ぬやうにて外の方をながめたまへれど、後目はただならず、いかにぞ、うちとけまさりのいささかもあらば、うれしからむ」と思すも、あながちなる御心なりや。

まづ、居丈の高く、を背長に見えたまふに、さればよと、胸つぶれぬ。うちつぎて、あなかたはと見ゆるものは鼻なりけり。ふと目ぞとまる。普賢菩薩の乗物とおぼゆ。あさましう高うのびらかに、先の方すこし垂りて色づきたること、ことのほかにうたてあり。色は雪はづかしく白うて、さ青に、額つきこよなうはれたるに、なほ下がちなる面やうは、おほかたおどろおどろしう長きなるべし。痩せたまへること、いとほしげにさらぼひて、肩のほどなど、痛げなるまで衣の上まで見ゆ。「何に残りなう見あらはしつらむ」と思ふものから、めづらしきさまのしたれば、さすがにうち見やられたまふ。頭つき、髪のかかりはしも、うつくしげにめでたしと思ひきこゆる人々にもをさをさ劣るまじう、袿の裾にたまりて引かれたるほど、一尺ばかりあまりたらむと見ゆ。

着たまへる物どもをさへ言ひたつるも、もの言ひさがなきやうなれど、昔物語にも人の御装束をこそまづ言ひためれ。聴色のわりなう上白みたる一かさね、なごりなう黒き袿かさねて、表着には黒貂の皮衣、いときよらにかうばしきを着たまへり。古代のゆゑづきたる御装束なれど、なほ若やかなる女の御よそひには似げなうおどろおどろしきこと、いともてはやされたり。されど、げに、この皮なうて、はた、寒からましと見ゆる御顔ざまなるを心苦しと見たまふ。何ごとも言はれたまはず、我さへ口とぢたる心地したまへど、例のしじまもこころみむと、とかう聞こえたまふに、いたう恥ぢらひて、口おほひしたまへるさへひなび古めかしう、ことごとしく儀式官の練り出でたる肘もちおぼえて、さすがにうち笑みたまへるけ気色、はしたなうすずろびたり。いとほしくあはれにて、いとど急ぎ出でたまふ。「頼もしき人なき御ありさまを、見そめたる人には、疎からず思ひ睦びたまはむこそ、本意ある心地すべけれ、ゆるしなき御気色なれば、つらう」などことつけて、

朝日さす軒のたるひはとけながら
などかつららのむすぼほるらむ

とのたまへど、ただ「むむ」とうち笑ひて、いと口重げなるもいとほしければ、出でたまひぬ。

（新編日本古典文学全集『源氏物語』第6帖「末摘花」）

【現代語訳】

やっと夜が明けて行きそうであったから、源氏は自身で格子を上げて、近い庭の雪の景色を見た。人の踏み開いた跡もなく、遠い所まで白く寂しく雪が続いていた。今ここから出て行ってしまうのもかわいそうに思われて言った。

「夜明けのおもしろい空の色でもいっしょにおながめなさい。いつまでもよそよそしくしていらっしゃるのが苦しくてならない」

まだ空はほの暗いのであるが、積もった雪の光で常よりも源氏の顔は若々しく美しく見えた。老いた女房たちは目の楽しみを与えられて幸福であった。

「さあ早くお出なさいまし、そんなにしていらっしゃるのはいけません。素直になさるのがいいのでございますよ」

などと注意をすると、この極端に内気な人にも、人の言うことは何でもそむけないところがあって、姿を繕いながら膝行って出た。源氏はその方は見ないようにして雪をながめるふうはしながらも横目は使わないのでもない。どうだろう、この人から美しい所を発見することができたらうれしかろうと源氏の思うのは無理な望みである。すわった背中の線の長く伸びていることが第一に目へ映った。はっとした。その次に並みはずれなものは鼻だった。注意がそれに引かれる。普賢菩薩の乗った象という獣が思われるのである。高く長くて、先のほうが下に垂れた形のそこだけが赤かった。それがいちばんひどい容貌の欠陥だと見える。顔色は雪以上に白くて青みがあった。額が腫れたように高いのであるが、それでいて下方の長い顔に見えるというのは、全体がよくよく長い顔であることが思われる。痩せぎすなことはかわいそうなくらいで、肩のあたりなどは痛かろうと思われるほど骨が着物を持ち上げていた。なぜすっかり見てしまったのであろうと後悔をしながらも源氏は、あまりに普通でない顔に気を取られていた。頭の形と、髪のかかりぐあいだけは、平生美人だと思っている人にもあまり劣っていないようで、裾が袿の裾をいっぱいにした余りがまだ一尺くらいも外へはずれていた。その女王の服装までも言うのはあまりにはしたないようではあるが、昔の小説にも女の着ている物のことは真先に語られるものであるから書いてもよいかと思う。桃色の変色してしまったのを重ねた上に、何色かの真黒に見える袿、黒貂の毛の香のする皮衣を着ていた。毛皮は古風な貴族らしい着用品ではあるが、若い女に似合うはずのものでなく、ただ目だって異様だった。しかしながらこの服装でなければ寒気が堪えられぬと思える顔であるのを源氏は気の毒に思って見た。

何とももものが言えない。相手と同じように無言の人に自身までがなった気がしたが、この人が初めからものを言わなかったわけも明らかにしようとして何かと尋ねかけた。袖で深く口を被うているのもたまらなく野暮な形である。自然肱が張られて練って歩く儀式官の袖が思われた。さすがに笑顔になった女の顔は品も何もない醜さを現わしていた。源氏は長く見ていることがかわいそうになって、思ったよりも早く帰って行こうとした。

「どなたもお世話をする人のないあなたと知って結婚した私には何も御遠慮なんかなさらないで、必要なものがあったら言ってくださると私は満足しますよ。私を信じてくださらないから恨めしいのですよ」

などと、早く出て行く口実をさえ作って、

朝日さす軒のたるひは解けながらなどかつららの結ぼほるらん

と言ってみても、「むむ」と口の中で笑っただけで、返歌の出そうにない様子が気の毒なので、源氏はそこを出て行ってしまった。

（與謝野晶子訳『全訳源氏物語』）

すなわち、彼女は座高が高く胴長で、あきれるほど長く伸びた鼻の先が赤くてみっともなく、この醜い鼻が一番ひどい容貌上の欠点となっていたという。青白い顔は驚くほどの面長で、肩のあたりは痩せてごつごつしている。あまりにも異様な顔かたちをしているため、源氏は目をそらすことができなかった。しかし、唯一、髪の毛だけは他のすばらしい女性にまったく引けをとらず、袿の裾にたまっている部分が一尺にあまりある長さに見えたという。さらに、身に付けているものといっては、汚れた袿や黒貂の皮衣といった若い女性に似つかわしくない装束を身にまとい、源氏が和歌を詠んでも機転を利かせて返歌することもできない。このように何から何まで醜くさえない末摘花に、源氏は失望する。しかし、失望しながらも源氏は末摘花を見捨てることは無かった。物語によると、末摘花の醜い全容を見た後でも源氏は末摘花に以下のような心遣いを見せるのである。

【原文】

世の常なるほどの、ことなることなさならば、思ひ棄ててもやみぬべきを、さだかに見たまひて後はなかなかあはれにいみじくて、まめやかなるさまに常におとづれたまふ。黒貂の皮ならぬ絹、綾、綿など、老人どもの着るべき物のたぐひ、かの翁のためまで上下思しやりて奉りたまふ。かやうのまめやか事も恥づかしげならぬを、心やすく、さる方の後見にてはぐくまむと思ほしとりて、さまことにさならぬうちとけわざもしたまひけり。

（新編日本古典文学全集『源氏物語』第6帖「末摘花」）

【現代語訳】

女王が普通の容貌（きりょう）の女であったら、源氏はいつでもその人から離れて行ってもよかったであろうが、醜い姿をはっきりと見た時から、かえってあわれむ心が強くなって、良人（おっと）らしく、物質的の補助などもよくしてやるようになった。黒貂（ふるき）の毛皮でない絹、綾（あや）、綿、老いた女たちの着料になる物、門番の老人に与える物までも贈ったのである。こんなことは自尊心のある女には堪えがたいことに違いないが常陸（ひたち）の宮の女王はそれを素直に喜んで受けるのに源氏は安心して、せめてそうした世話をよくしてやりたいという気になり、生活費などものちには与えた。

（與謝野晶子訳『全訳源氏物語』）

これによると、あの醜い容貌が忘れ難いといって、生活に困窮している末摘花になにくれとなく援助し、その暮らし向きを世話するようになったとされる。その後、末摘花は歳の暮に源氏に正月の晴れ着を贈るなどの見当違いな行動をするものの、源氏は律儀にも歳明けの正月七日、末摘花を訪れる。

【原文】

朔日のほど過ぎて、今年、男踏歌あるべければ、例の所どころ遊びののしりたまふにもの騒がしけれど、さびしき所のあはれに思しやらるれば、七日の日の節会果てて、夜に入りて御前よりまかでたまひけるを、御宿直所にやがてとまりたまひぬるやうにて、夜更かしておはしたり。例のありさまよりは、けはひうちそよめき世づいたり。君もすこしたをやぎたまへる気色もてつけたまへり。いかにぞ、あらためてひきかへたらむ時とぞ思しつづけらるる。日さし出づるほどにやすらひなして出でたまふ。東の妻戸おし開けたれば、むかひたる廊の上もなくあばれたれば、日の脚ほどなくさし入りて、雪すこし降りたる光に、いとけざやかに見入れらる。御直衣など奉るを見出だして、すこしさし出でて、かたはら臥したまへる頭つき、こぼれ出でたるほどいとめでたし。生ひなほりを見出でたらむ時と思されて、格子引き上げたまへり。

いとほしかりし物懲りに、上げもはてたまはで、脇息をおし寄せてうちかけて、御鬢ぐきのしどけなきをつくろひたまふ。わりなう古めきたる鏡台の、唐櫛笥、掻上の箱など取り出でたり。さすがに、男の御具さへほのぼのあるを、されてをかしと見たまふ。女の御装束、今日は世づきたりと見ゆるは、ありし箱の心葉をさながらなりけり。さも思しよらず、興ある文つきてしるき表着ばかりぞあやしとは思しける。「今年だに声すこし聞かせたまへかし。侍たるるものはさしおかれて、御気色のあらたまらむなむゆかしき」とのたまへば、「さへづる春は」と、からうじてわななかしいでたり。「さりや。年経ぬるしるしよ」と、うち笑ひたまひて、「夢かとぞ見る」と、うち誦じて出でたまふを、見送りて添ひ臥したまへり。口おほひの側目より、なほかの末摘花、いとにほひやかにさし出でたり。見苦しのわざやと思さる。

（新編日本古典文学全集『源氏物語』第6帖「末摘花」）

【現代語訳】

元三日が過ぎてまた今年は男踏歌であちらこちらと若い公達が歌舞をしてまわる騒ぎの中でも、寂しい常陸の宮を思いやっていた源氏は、七日の白馬の節会が済んでから、お常御殿を下がって、桐壺で泊まるふうを見せながら夜がふけてから末摘花の所へ来た。これまでに変わってこの家が普通の家らしくなっていた。女王の姿も少し女らしいところができたように思われた。すっかり見違えるほどの人にできればどんなに犠牲の払いがいがあるであろうなどとも源氏は思っていた。日の出るころまでもゆるりと翌朝はとどまっていたのである。東側の妻戸をあけると、そこから向こうへ続いた廊がこわれてしまっているので、すぐ戸口から日がはいってきた。少しばかり積もっていた雪の光も混じって室内の物が皆よく見えた。源氏が直衣を着たりするのをながめながら横向きに寝た末摘花の頭の形もその辺の畳にこぼれ出している髪も美しかった。この人の顔も美しく見うる時が至ったらと、こんなことを未来に望みながら格子を源氏が上げた。かつてこの人を残らず見てしまった雪の夜明けに後悔されたことも思い出して、ずっと上へは格子を押し上げずに、脇息（きょうそく）をそこへ寄せて支えにした。源氏が髪の乱れたのを直していると、非常に古くなった鏡台とか、支那出来の櫛箱、掻き上げの箱などを女房が運んで来た。さすがに普通の所にはちょっとそろえてあるものでもない男専用の髪道具もあるのを源氏はお

もしろく思った。末摘花が現代人風になったと見えるのは三十日に贈られた衣箱の中の物がすべてそのまま用いられているからであるとは源氏の気づかないところであった。よい模様であると思った袿にだけは見覚えのある気がした。

「春になったのですからね。今日は声も少しお聞かせなさいよ、鶯よりも何よりもそれが待ち遠しかったのですよ」

と言うと、「さへづる春は」（百千鳥囀る春は物ごとに改まれどもわれぞ古り行く）とだけをやっと小声で言った。

「ありがとう。二年越しにやっと報いられた」

と笑って、「忘れては夢かとぞ思ふ」という古歌を口にしながら帰って行く源氏を見送るが、口を被うた袖の蔭から例の末摘花が赤く見えていた。見苦しいことであると歩きながら源氏は思った。

（與謝野晶子訳『全訳源氏物語』）

右掲の叙述によると、源氏が心づくしの援助をした甲斐あって、末摘花の家は普通の家らしくなり、彼女自身にも少し女らしいところが出てきたようであった。さらに、源氏が贈った装束を身に付け、精一杯の努力をして源氏と会話をしたという。しかし、口を被った袖の陰から見える件の末摘花（赤い鼻）が相変わらず見苦しいと酷評され、その容姿の劣っている様について、やはり強調されている。

さて、それから数年後、源氏が須磨明石に配流されて離京している間に末摘花はまたしても窮乏した生活に陥ってしまう。さらに、帰京後も末摘花のことをすっかり忘れてしまった源氏は彼女のことをまったく顧みず、末摘花の生活は一層、危機的状況に見舞われる。たとえば、地方に下る受領に嫁いだ叔母に召し使いにされそうになったり、仕えている女房たちに次々と見限られ、頼りにしていた乳母子の侍従も叔母に従って屋敷を出て行ってしまう。落ちぶれ果てた末摘花のもとへ、やっと源氏が遅ればせながら訪れた。源氏は再び末摘花を手厚く援助するようになる。源氏のその援助について、物語は以下のように叙述する。

【原文】

祭、御禊などのほど、御いそぎどもにことつけて、人の奉りたる物いろいろに多かるを、さるべきかぎり御心加へたまふ。中にも、この宮には、こまやかに思しよりて、睦ましき人々に仰せ言たまひ、下部どもなど遣はして、蓬払はせ、めぐりの見苦しきに板垣といふものうち堅め繕はせたまふ。かう尋ね出でたまへりと聞き伝へんにつけても、わが御ため面目なければ渡りたまふことはなし。御文いとこまやかに書きたまひて、二条院いと近き所を造らせたまふを、「そこになむ渡したてまつるべき。よろしき童べなど求めさぶらはせたまへ」など、人々の上まで思しやりつつ、とぶらひきこえたまへば、かくあやしき蓬のもとには、置きどころなきまで、女ばらも空を仰ぎてなむ、そなたに向きてよろこびきこえける。

なげの御すさびにても、おしなべたる世の常の人をば目とどめ耳たてたまはず、世にすこしこれはと思ほえ、心地にとまるふしあるあたりを尋ね寄りたまふものと人の知りたるに、かく引き違へ、何ごともなのめにだにあらぬ御ありさまをものめかし出でたまふは、いか

なりける御心にかありけむ。これも昔の契りなめりかし。
いまは限りと侮りはてて、さまざまに競ひ散りあかれし上下の人々、我も我も参らむと争ひ出づる人もあり。心ばへなど、はた、埋れいたきまでよくおはする御ありさまに心やすくならひて、ことなることなきなま受領などやうの家にある人は、ならはずはしたなき心地するもありて、うちつけの心みえに参り帰る。
君は、いにしへにもまさりたる御勢ひのほどにて、ものの思ひやりもまして添ひたまひにければ、こまやかに思しおきてたるに、にほひ出でて宮の内やうやう人目見え、木草の葉もただすごくあはれに見えなされしを、遣水かき払ひ、前栽の本立ちも涼しうしなしなどして、ことなるおぼえなき下家司の、ことに仕へまほしきは、かく御心とどめて思さるることなめりと見取りて、御気色たまはりつつ、追従し仕うまつる。
二年ばかりこの古宮にながめたまひて、東の院といふ所になむ、後は渡したてまつりたまひける。対面したまふことなどはいと難けれど、近き標のほどにて、おほかたにも渡りたまふに、さしのぞきなどしたまひつつ、いと侮らはしげにもてなしきこえたまはず。
かの大弐の北の方上りて驚き思へるさま、侍従が、うれしきものの、いましばし待ちきこえざりける心浅さを恥づかしう思へるほどなどを、いますこし問はず語りもせまほしけれど、いと頭いたううるさくものうければなむ、いままたもついであらむをりに、思ひ出でてなむ聞こゆべきとぞ。

（新編日本古典文学全集『源氏物語』第15帖「蓬生」）

【現代語訳】
賀茂祭り、斎院の御禊（ごけい）などのあるころは、その用意の品という名義で諸方から源氏へ送って来る物の多いのを、源氏はまたあちらこちらへ分配した。その中でも常陸の宮へ贈るのは、源氏自身が何かと指図（さしず）をして、宮邸に足らぬ物を何かと多く加えさせた。親しい家司（けいし）に命じて下男などを宮家へやって邸内の手入れをさせた。庭の蓬（よもぎ）を刈らせ、応急に土塀（どべい）の代わりの板塀を作らせなどした。源氏が妻と認めての待遇をし出したと世間から見られるのは不名誉な気がして、自身で訪ねて行くことはなかった。手紙はこまごまと書いて送ることを怠らない。二条の院にすぐ近い地所へこのごろ建築させている家のことを、源氏は末摘花に告げて、

そこへあなたを迎えようと思う、今から童女として使うのによい子供を選んで馴（な）らしておおきなさい。

ともその手紙には書いてあった。女房たちの着料までも気をつけて送って来る源氏に感謝して、それらの人々は源氏の二条の院のほうを向いて拝んでいた。一時的の恋にも平凡な女を相手にしなかった源氏で、ある特色の備わった女性には興味を持って熱心に愛する人として源氏をだれも知っているのであるが、何一つすぐれた所のない末摘花をなぜ妻の一人としてこんな取り扱いをするのであろう。これも前生の因縁ごとであるに違いない。もう暗い前途があるばかりのように見切りをつけて、女王の家を去った人々、それは上から下まで幾人もある旧召使が、われもわれもと再勤を願って来た。善良さは稀（まれ）に見るほどの女性である末摘花のもとに使われて、気楽に暮らした女房たちが、ただの地方官の家などに雇われて、気まずいことの多いのにあきれて帰って来る者もある。見えすいたような

追従も皆言ってくる。昔よりいっそう強い勢力を得ている源氏は、思いやりも深くなった今の心から、扶(たす)け起こそうとしている女王の家は、人影もにぎやかに見えてきて、繁(しげ)りほうだいですごいものに見えた木や草も整理されて、流れに水の通るようになり、立ち木や草の姿も優美に清い感じのするものになっていった。職を欲(ほ)しがっている下家司(しもけいし)級の人は、源氏が一人の夫人の家として世話をやく様子を見て、仕えたいと申し込んで来て、宮家に執事もできた。

末摘花は二年ほどこの家にいて、のちには東の院へ源氏に迎えられ、夫婦として同室に暮らすようなことはめったになかったのであるが、近い所であったから、ほかの用で来た時に話して行くようなことくらいはよくして、軽蔑(けいべつ)した扱いは少しもしなかったのである。大弐の夫人が帰京した時に、どんな驚き方をしたか、侍従が女王の幸福を喜びながらも、時が待ち切れずに姫君を捨てて行った自身のあやまちをどんなに悔いたかというようなことも、もう少し述べておきたいのであるが、筆者は頭が痛くなってきたから、またほかの機会に思い出して書くことにする。

（與謝野晶子訳『全訳源氏物語』）

これによると、久しぶりの再会を果たした源氏は、賀茂祭や斉院の御禊などに贈られてくるものを末摘花に分配したり、親しい家司に命じて彼女の邸宅の手入れをさせるなどして、手厚い庇護を加えたという。その甲斐あって、かつて末摘花を見放した召使いたちも戻り、源氏に厚遇されている末摘花にあやかろうとして新たに仕えることを志願するものが出てくるなど、当家はにぎやかに栄える。さらに2年ほど後には、源氏の邸宅である二条院の東院に迎えられ、めぐまれた生活を送る。その様は、末摘花を虐げようとした叔母が驚き、あるいは心ならずもその叔母に従い、末摘花から離れた侍従が恥ずかしく思うほどであったという。

このように、醜く容姿の劣った末摘花であるが、源氏は妻の1人に加え、誠意を尽くして面倒を見る。この設定は、華やかな王朝貴族たちの恋愛を主題とし、光源氏にふさわしい女性を恋の相手として描く傾向が強い同作品において、一見、違和感のある展開といえよう。この不自然な設定について、留学生の中には、「特殊な趣味を持つ光源氏が末摘花のユニークな個性に惹かれた」、「末摘花の善良で一途な性格に源氏が惹かれた」などといった現代的な解釈を試みがちである。しかしながら、日本の古典籍では、登場人物を描写するときに、「個人」を重視した人物像の描写をすることはほとんどない。あくまで、物語の構想の意図に基づいた設定に従って人物像を造型してゆくのが常套である。そこで、当該授業では、留学生の古典籍における人物像読解の誤りを正すべく、末摘花の人物描写がどのような物語の意図に基づいているのかという問題点について言及している。次に、その具体的な内容について報告する。

（2）末摘花像の造型―醜女の呪力―

前節で確認したように、『源氏物語』における末摘花は、一貫して「醜い容姿にも関わらず、最後は幸運をつかむ果報者」として描かれている。このような末摘花の人物像を読み解く手がかりとして、当該授業では、彼女の「醜い容姿」を『古事記』の石長比売になぞらえる先学の指摘（注参照）に注目している。これらの指摘については、『源氏物語』を解釈する際の定説とまで断じることは難しいが、同物語を実証的に読む訓練をするのに参考となる方法論を提示し

ていると判じられる。そこで、あくまで「実証的に読む訓練」の一例としてこれらの学説に基づいた解釈を授業で紹介している。以下に報告する授業内容についても、その前提をご認識いただければと思う。

さて、『古事記』において石長比売が登場する部分は以下の通りである。

【書き下し文】

ここに天津日高日番能二迩迩芸能命、笠沙の御前に麗しき美人に遇いひたまひき。ここに「誰が女ぞ」と問ひたまへば、答へて白さく、「大山津見神の女、名は神阿多都比売、亦の名は木花之佐久夜毘売と謂ふ」とまをしき。また、「汝の兄弟ありや」と問ひたまへば、「我が姉、石長比売あり」と答へ白しき。ここに、「吾汝に目合せむと欲ふは奈何に」と詔りたまへば、「僕はえ白さじ。僕が父大山津見神ぞ白さむ」と答え白しき。かれ、その父大山津見神に乞ひに遣はしたまひし時、いたく歓喜びて、その姉石長比売を副へ、百取の机代の物を持たしめて、奉り出しき。かれここに、その姉はいと凶醜きによりて、見畏みて返し送り、ただその弟木花之佐久夜毘売を留めて、一宿婚したまひき。

ここに大山津見神、石長比売を返したまひしによりていたく恥ぢ、白し送りて言はく、「我が女二並べて立奉りし由は、石長比売を使はさば、天つ神の御子の命は、雪零風吹くとも、恒に石の如く常は堅はに動かず坐さむ。また木花之佐久夜毘売を使はさば、木の花の栄ゆるが如栄えまさむと、うけひて貢進りき。かく石長比売を返さしめて、独り木花之佐久夜毘売を留めたまひし故に、天つ神の御子の御寿は、木の花のあまひのみ坐さむ」といひき。かれここをもちて、今に至るまで天皇命等の御命長からざるなり。

（新編日本古典文学全集『古事記』上巻）

【現代語訳】

さて、アマツヒコホノニニギは、あるとき笠沙の岬に出かけて、うるわしいおとめごに出逢うたのじゃった。そこで、

「だれの娘ごか」と問うたところが、おとめは答えての、

「オホヤマツミの娘、名はカムアツタヒメ、またの名はコノハナノサクヤビメと申します」と、そう言うたのじゃ。それでまた、

「そなたには、兄弟はいるか」と尋ねるとの、

「わが姉、イハナガヒメがおります」と答えた。

それでニニギが、

「われは、そなたを妻にしようと思うが、いかがか」と問うと、

「わたくしにはお答えすることができません。あが父、オホヤマツミがお答えいたすでしょう」と答えたのじゃった。

そこで、その父オホヤマツミに妻乞いの使いを遣わしたところがの、オホヤマツミはとても喜び、姉のイハナガヒメも副えて、山ほどに盛り上げたいくつもの契りの品を持たせての、ニニギの許に嫁がせたのじゃ。

ところが、その姉のイハナガヒメはひどく醜いお顔の方での、ニニギはひと目見るなり畏れおののいてしもうて、親許へ送り返してしまい、その弟ごのコノハナサクヤビメだけ

を留めての、一夜の契りを交わしたのじゃった。

すると、父のオホヤマツミは、イハナガヒメを返されたことを大いに恥じての、怒りをこめて、ヒコホノニニギに詛いの言葉を送ったのじゃ。

わたしが娘二人を並べて奉ったわけは、イハナガヒメをお使いになれば、天つ神の御子の命は、たとえ雪降り、風吹くとも、いつまでも岩のごとくに、常永久に、変わりなくいますはず、また、コノハナノサクヤビメをお使いになれば、木の花の咲き栄えるがごとくに栄えいますはずと、祈りを込めて娘たちを差し上げました。

それを、かくのごとくにイハナガヒメを送り返して、ひとりコノハナノサクヤビメだけをお留めなされたからには、天つ神の御子の命は、山に咲く木の花のままに散り落ちましょうぞ。

それでこのためにの、今に至るまで大君たちの命は長くなくなってしもうたのじゃった。まあのう、人はもともと草とおなじ生まれじゃで、生えては枯れ、枯れては生えるものじゃが、大君は天つ神の末じゃで、このことがなければ命の極まることはなかったのかもしれぬがのう。

（三浦祐之訳・注釈『口語訳古事記〔完全版〕』）

これは、天孫・迩迩芸能命の降臨場面を叙述した著名な段である。右によると、国津神である大山津見神が、娘の木花之佐久夜毘売に姉の石長比売を添えて迩迩芸能命に嫁がせたところ、石長比売は容姿が醜くかったので送り返されてしまったという。実は、石長比売は永遠の命の象徴、木花之佐久夜毘売は繁栄の象徴であったので、石長比売を返してしまった天つ神の御子の寿命ははかないものになってしまったというのである。いわゆる人間の寿命の短さや死の起源を説くバナナ・タイプ型の神話の類型である。

この神話から伺えるように、古代信仰においては、醜女を以て呪力を有する神女とし、その女性を捨てた男性は不幸になって死を招くという伝承が存在していた。このような古代伝承を援用して、『源氏物語』の末摘花譚を構造的に解釈するならば、末摘花は霊力を持つ醜女（神女）の石長比売になぞらえられ、彼女を見捨てず契りを結んだ源氏は、その因果によって幸福と繁栄を得ることができた神の子に擬することも可能ではないだろうか。

以上のように、『源氏物語』に神話に類するモチーフになぞらえる手法のあった可能性を予想するならば、末摘花を醜女とする人物像の造型もそのような手法の一環として解釈する読みもありえるのではないだろうか。いずれにせよ、神話的・民俗学的な解釈は『源氏物語』のみならず、日本の古典籍における多くの作品に有用な手法である。さらにこれは、主に他の文献との比較対照によって見出すことができる方法論で、しかもその「比較検討」の作業は、日本文学研究の最も基礎となる部分である。日本の古典文学を学ぶ留学生には、積極的にこのような作品解釈の手法を身に付けることを促している。

（3）授業の行い方

当該授業で使用する教材は以下の通りである。

前章の古代文学史と同様、ハンドブックとして『新総合図説国語』を利用している。

次に、『源氏物語』を講読するためのテキストとして、本章で引用した新編日本古典文学全集

『源氏物語』（阿部秋生他訳・注、小学館、1994年３月～1998年４月）と『與謝野晶子訳　全訳源氏物語』の上・中・下（角川書店、1971年８月・11月・1972年２月）を用いている。前者は『古事記』同様、充実した頭注と脚部、口語訳が併記されている。後者は近代文学史を代表する女流歌人の与謝野晶子の手になる口語訳ということで学習効果が高い。近代文学史で与謝野晶子を学ぶ際にも取り上げているテキストである。なお、補助教材として、2001年に公開された東映製作の映画『千年の恋・ひかる源氏物語』（監督・堀川とんこう）のDVDを使用している。

さらに、当該授業で取り上げた問題点を考察するために用いた『古事記』は、前章でも引用した新編日本古典文学全集『古事記』と『口語訳古事記〔完全版〕』を使用している。

以上のような教材を用いながら、だいたい2コマ程度の時間をかけて、次の①～④の手順に従って授業を展開する。

①中古文学史の概略とその中での『源氏物語』の位置づけの確認。（『新総合図説国語』の精読による）

②『源氏物語』全体のあらすじの把握。（映画『千年の恋・ひかる源氏物語』の主要場面の視聴による）

③『源氏物語』における「末摘花」の人物像とその問題点についての説明。（新編日本古典文学全集『源氏物語』『與謝野晶子訳　全訳源氏物語』の講読による。講読該当箇所は本章第（１）節で引用した部分）

④『源氏物語』の「末摘花」の人物像に関する問題点の考察と神話的・民俗学的な読みに基づきながら実証的な本文の解釈を進めてゆく実践練習。（『古事記』上巻天孫降臨の段の講読による。講読該当箇所は本章第（２）節で引用した部分）

受講生に対する課題については、授業中に配布するMessage paper（前章の参考資料①と同じ）への記入事項を通して、毎回の授業における学習内容の確認と疑問点の整理を課している。なお、Message paperに記された質問事項については、翌回の授業で回答している。

Ⅳ．おわりに

以上、当センターで稿者が担当している「日本文学講義Ⅳ　日本文学史」の授業における「上代文学史」と「中古文学史」の事例について報告した。今回は、『古事記』と『源氏物語』のみを取り上げたが、実際の授業ではそのほかの作品についても触れている。その件については、いずれ別稿に報告したい。同じく、今回は取り上げることができなかった中世、近世、近・現代の文学史を扱った授業においても報告するべき事例は多くあり、こちらもぜひ、近いうちに改めて別稿を用意したい。

注

・高崎正秀「源氏物語の成立―末摘花伝承を中心に―」（『民俗文学講座』第四巻」『弘文堂・1960・6）

・林田孝和「末摘花物語の『笑い』の形成二」（『国学院雑誌』1970・1）

・秋山虔編『源氏物語事典』（『別冊国文学』36学燈社、1989・5）

＜引用文献＞の出典は本文中に明示。

参考文献

- 『日本古典文学大辞典』（市古貞次ほか監修、日本古典文学大辞典編集委員会編、岩波書店、1983年10月～1985年2月）
- 『日本伝奇伝説大事典』（乾克己ほか編著、角川書店、1986年10月）
- 『日本民俗学辞典』（中山太郎編、パルトス社、1998年6月）
- 『定本柳田国男集』全巻（筑摩書房、1962年～1977年）

（にほんまつ　やすこ　本センター非常勤講師）